



育児支援を考える～番外編2

<手記その2ー産後ケア>

生まれて一週間で水俣の自宅に戻りました。両親も他界、パートナーも1000キロ以上離れた所に住んでいる私は、産後は、水俣の同世代の友人たちがシフトを組んでお世話に来てくれました。出産前の助産院の受診では、大橋先生から「産後は、最初の1か月で10～15回訪問します。あなたのために正月はあけてあるからね」と言われ、「ええええ!!! 身の回りの手伝いはあるし、助産師の訪問はそんなにいらないのでは～?」と内心思いつつ、産後に突入しました。

必要ないと思っていたのに、ど・れ・ほ・ど、大橋先生の訪問で助けられたか! 最初の出産で右も左もわからない。経験を聞く親もない(友達はいたけど)。体はぼろぼろ。そして、何より、日赤で(出産自体はよかったが)産後の授乳指導で傷つきまくり、心がボロボロだったのです。

大橋先生は、数日に一度、淡々と訪問してくれました。「大橋で一す。どう?」産後の私は、見た目はかなり元気で、退院後は、子どもへの数時間ごとの授乳はもちろん、洗濯から茶わん洗いまでほぼ自分でやっていました。友人たちが来てくれて本当に助かりながらも、毎日違う人が家に来てくれることへの対応にも気が張っていました。たぶん、テンションを高く保つホルモンが出ていて、乗り切れていましたが、常に体は戦闘状態。45歳での産後に、疲れ、体の軋みがたまっているのを感じていました。そして何より、生まれてきたばかりのか細いのちと二人で、未知の問題や不安が次々に立ち現われました。

そんなときに、大橋助産師が、何を質問しても的確に情報をくれ、一緒に考えて答えを探してくれました。クラニオ(頭蓋仙骨療法)の整体を受けている時間だけが、産後数か月の戦闘態勢の体を緩めてくれる時間でした。整体を受けると、ふわ一つと体が緩み、深く深く眠りにつきました。小さな命のとなりで、常に唯一の大人として気を緩める瞬間のない私にとって、その時間だけが深い眠りの時間でした。整体後も、大橋先生は無理に起こすことなく、自然のプロセスに任せて意識が戻ってくるのを待っていてくれました。大橋先生は、専門職でありながら、時に母親のようであり、時に女としての同志・先輩であり、変化しながら、そのときどきに、私が母親として最大限力を発揮できるように、愛と力を注いでくれました。

さん SUN 助産院 院長の大橋です。

過分な評価に戸惑いつつも、有り難いと思いました。私たちの活動が評価され表に出る機会を下さった石原さんに心から感謝致します。一人でも多くの母子に私たちの手が届く事を目標に頑張りたいと思います。

さん SUN 助産院のスタッフは今日も優しく母子を迎えています。皆さんのお電話お待ちしております。

